

# 虫めがね

## 「人間」としての 科学者

ナオミ・E・ピアス

*A scientist of great humanity*  
By Dr. Naomi E. Pierce

昆虫学者であり、進化理論の研究者であるイギリスのW.D.ハミルトン氏は、1993年に、日本の「京都賞」を受賞した。このたび、氏の主要論文が『遺伝子の国の細い道』(“Narrow Roads of Gene Land”)と題して、新たに注釈を加え、一冊の本にまとめられた。ここに収められた論文は、どれも進化生物学に大きなインパクトをあたえた論考ばかりである。

ハミルトン氏はかねてより日本文化にも興味をもち、このたびの著書も芭蕉の『奥の細道』(“Narrow Roads of Oku”)へのオマージュとなっている。もちろん両者の方法論は異なる。だが、探究の姿勢はおおいに重なるといってよい。芭蕉は、道中の体験から、その鋭い感性を通して人間性への深い洞察にいたった。ハミルトン氏は、遺伝学的手法、分析的な手法を駆使し、動物の行動と進化について、深く鋭い理解を得ようとする。芭蕉は旅人であり、ハミルトン氏もまた科学の世界の旅人なのだ。

昨年、氏は私の研究室を訪れた。当時、彼は上記の著書の編集を進めていた。そうした事情もあって、友人である彼の新著を私は格別の思いで手にとった。各論文に添えられた序文には、著者の当時の関心事など、具体的な状況が描かれている。著名な論文は私にとってすでになじみのあるものだが、新たな序文から学ぶものは大きかった。

私たちは、ともすれば科学を非人間的な営みと思いがちだ。たとえば、科学者は科学的な方法論に頼りきり、ただただ真理へとつき進む存在、血の通わない機械のような存在だ、と。だが、科学者も人間である。人に思いを寄せることもあれば、人とのつきあいの中で右往左往することもある。希望を抱き、また後悔の念にかられることだってあるはずだ。人と出会って、多大な影響を受けることもある。

もちろん、こんなことはわざわざ断るまでもないことかもしれない。しかし、ハミルトン氏の新著を通じて、私は科学という営みの人間的な側面にあらためて触れ、そのすばらしさに強い感銘を受けたのである。

(ハーバード大学生物学教授)

